

●明治三十九年一月中に静岡附近にて捕はれたる鳥類

(一)小かわらひわ

以上二種は混じて多く捕せらる。

(二)中かわらひわ

(三)大かわらひわ

少し。

(四)ほうあか

少し、十一月始渡り来る。

(五)ほうじろ

多し、十二月始渡り来る。

(六)かしらだか

多し、「たほうじろ」と云ふ。

(七)うそ

少し、雄を「赤うそ」雌を「黒うそ」と云ふ。

云ふ。

(八)べにまーこ

少し、唯一羽雌を見たるのみ。

(九)すづめ

少し、静岡附近に「渡り来る雀」と

(通常の雀)

「年中留り居る雀」とあり、而して渡

りは通常十一月始にして、留鳥とし

て年中見るものは鳥を以て罟罟網を

使用して昌に捕ふ。

(一〇)いかる

少からず、此は年によりて多少の差

あり本年一月は稍多く捕せられた

り。

(一一)しめ

少し、此も年に由りて多少あり。

(一二)あをじ

多からず。

(一三)とうつぐみ

本年は多く捕せらる、當月は多く見

たり。

(一四)たひばり

少なし、渡りは十月、「せきれい」と共

に見る。

(一五)まつひ

稀なり。

(一六)かけす

多し、渡りは十一月始にて翌年三月

迄居る。

(一七)ひよざり

多し

(一八)あかはら

稍多し

(一九)しろはら

稍多し

此三種と次の一種は食鳥として甚多く捕へらる。

(二〇)つぐみ

多し、雄雌にて著しく着色の異なるも

の有り。

(二一)きじはと

多し、寒鳩は脚氣の藥なりとて高價

なり。

(二二)うぐひす

少なし。

(二三)四十雀

少なし。

(二四)めじろ

少なし(静岡近在には多きものなれど)

ど)

(二五)あいさ

少からず、安倍川尻にて捕せらる。

(二六)かん

稀なも、而して何種が多く見ゆるか

不明なれども二十七日安倍郡賤機村

下村より來れる人の報に由るに同村

の御獵池なる鯨池に今日も尙約三十

羽の「かん」を見たりと。

まかも

此種が最も多し。

あじかも

(二七)かも

小かも

此も少からず。

くろかも

ともへかも

少なし。

以上の外には尙異種あるならん。

(二八)はいたか

少なし、余は上中旬に三羽を見たり。

(二九)たしぎ

稍多し、渡りは八月末にて翌年四月迄居る。

迄居る。

(三〇)ぼとしぎ

少なし、渡りは十一月にて翌年二月迄居る、静岡にて「山しぎ」とも云ふ。

少なし。

少なし。

(三一)かわせみ

少なし。

(三二)あをけら

少なし、上中旬に餘は三羽を見たり

(三三)あかげら

少なし、(静岡地方の「けら」中最多なり)。

少なし。

(三四)ありすい

少からず。

(三五)うすら

稍多し、静岡附近にて捕れたる

ものは生鳥のまゝ東京へ多く送らる。

今月は少なし、此は「寒ひばり」と云ひて高價也。

(三六)ひばり

甚少なし、余は本年一月始めて清水

港海岸にて捕せられたるものを見たり。

(三七)大せん

少なし、此は寒氣強きほど多く捕せ

らる、而して採集地は安倍郡賤機村

(三八)をしざり

少なし、此は寒氣強きほど多く捕せ

らる、而して採集地は安倍郡賤機村

迄居る。

(105)

動物學雜誌 第二百九號

雜
錄

下村鯨が池よりして麻機の沼へ毎朝

夕飛び行くものを網にて捕ふるなり

此外安倍郡大里村中田、八幡及び千

代田村上土の沼等にも捕せらる、

尙安倍川の中流安倍口にも、尙上

流牛妻より上にも見られ、藁科川

に従て上流に逆れば大川村坂の上附

近にても年々河流に渡り來ると云。

(三九)もす

一月になりては少なし。

(四〇)やまごり

稍多し、雄の方多く捕せらる。

(四一)このはづく

稍多し。

(四二)かもめ

一月安倍川口中島及下川原等の海岸

に見ゆるもの五種を下らず、此は後

日再調査の上更に報せん。

(四三)上びたき

少なし。

(四四)るりびたき

少なし。

(四五)むぐり

少なし。

(四六)みそざい

少なし。

(四七)まじ

少なし、四月産卵期に入れば多く捕
せらる。

以上四十八種以上の鳥は本年一月中余が静岡に居る間に追手町なる鷺巣剝製店に於て實際目に觸れたるものを掲げたるものにして此の外一月の鳥として尙數種を算するを得べけん、序に此所に注意しておくべき事は「中かはらひは」と云ふ鳥なり、此は同店にては毎年「かはらひは」を分て三種となしおれるが故に、此を載せたれども此は後日再調査を要すべきものなり、大小二種の外に中間のものと云ふもの實際別ちおく必要あるやも知れず、尙一つ附記しておく事は市内兩替町の柏亭と云ふ剝製店に静岡附近にて捕へられたる「やまごり」のアルビノを見たる事なり、此れは全體尾迄白くなりて唯少しく赤褐部を存する所は肩と尾の二箇所なりき、山鳥の白變りは今を去る十數年前徳川慶喜公在岡の砌、志太郡の山地にて曾て此の鳥の白變りを捕へられし事あり又安倍郡大川村坂の上の山地にも一羽居りて此は尾のみ白變りせりと云ふ、此は間もなく捕へら

れしが余は見るを得ざりき。

三十九年二月十日 小川三紀報

●動物研究法雜記

(六八)幼蟲のフレパレーションを作る簡便法を記さん
小生は海水の粘液ある幼蟲の幼蟲に試みしが他の二三のものにても同様に功を奏するなり一滴の水と幼蟲をスライドにのせ上よりビクロ醋酸を二三滴落し五分の後スライドの上の液を殆んど全くとり上より五十パーセントのアルコールを滴す此れにて幼蟲スライドにつく若し附着せざるときは半乾きとなし上よりアルコールを滴す二度目に着かざれば三度くりかへすべし次に八十五パーセントのアルコールに入れて暇あるまでまつ暇の出来きとき其をとり出し幼蟲の上に一二滴ホーラックスカーミンを落し二三分の後酸アルコールにて洗ひ九十パーセント無水と移し透明としてバルサムに封ず。

此法にては數多飼養しある幼蟲を同時に或は殆んど同時に殺し得るなり。

(六九)スパイロルピスの標本を作る法を友人より聞

き試むるに中々面白しアジモなどに付き居る生きたるスパイロルピスを十パーセントの醋酸を有するサブリメーターにて殺し一時間入れ置けば殻は泡となりて消へうせ動物浮び出す之をよく洗ひ通常の如く染め標本となす。

(七〇)ニユートラルレッドは兼て生き動物を染めるに宜き由聞きしが今夏實際試みに好結果ありたり。
此アニリン色は海水にはよく溶けず少くそけて紅褐色の液となる(淡水には赤色となる)永く置けば褐色針狀の結晶となる。

此液中にプランクトンを入るゝに各自色をこる力差ある故種々の度に染まり餘程長く生保し居る薄き液程長く生話し居る赤色のウニの子や紐蟲の子の活潑に遊び廻り居るは美事なり。

此色は核を染めずして細胞體中の顆粒を染む故に假令ばホーラックスカーミンの標本の陰像(negative)を得核のある所染まらずにのこる此 *intra vitam* の染色法はメタプラズマの研究に適す。

(やつ)

●論文摘要